

---

# 結磨様の休日

篠崎優砂

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

結磨様の休日

### 【Nコード】

N5843F

### 【作者名】

篠崎優砂

### 【あらすじ】

母親を小学校4年生のときになくした結磨を超マザコンの龍からみた友情的な話です<結磨>「あたし様に逆らう気なの?」<龍>「ちくしょう!変人のクセに!」

## ブログ

変だった

すつごく変だった

絶対に他の人とはちがかった

けれども僕の人生の中では一番とっていいほど印象に残る  
最強で最大の友達になった

なあ

長崎結磨

## プロローグ（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます

## 第一話：変人転入生？

行きたくない

絶対に行くもんか！

僕の名前は羽山龍

一応今日から中学受験生

…でも全然やる気はない（笑）

噂によると今日から塾の先生も結構厳しくなるみたいで

「はあああ~~~~いやだなあ塾なん…」どうした羽山~~~~~  
「~~~~~」

塾の前でため息をついていると後ろからキレのある声が聞こえた  
今日から僕らの担任になる林先生だった

「なあにため息なんかついてるの！転入生に笑われるよ！」

「…テンニユウセイ？」

初めて聞いた

転入生なんてくるんだ

「そうなんだよー！女子なんだけどねえ！いやまたかわいくって  
！」

えろじじいかよ（笑）

僕は一人で騒いでいる先生を放って教室に向かった

僕の席は真ん中の前から三番目の席だった（はずだ）

…ガチャ

久しぶりに教室のドアを開けた気がした

あれ…

いつもと違って教室が静かだった

「…どしたの」

僕は後ろの席の五木港に聞いた

「転入生」と港は口ばくで言う

…もう来てたのか

「なんか顔とか気になるんだよな」

「は…五木なにいつてんの？女好き？」

「いやそうじゃなくてさ」

五木はちらちらと転入生のほうを見ながら言った

「隣のクラスの田辺と幼馴染みらしいけど、アイツ、かわってるっぽいよ」

「変わってる？」

転入生の名前は長崎結磨

基本的に一人にいることは少ない

一見クラスの女子全員と友達かと思えるけど、本人に聞くと「友達いない」と答えるらしい

またボーっとしてることが多い

「授業始めるぞー」

林先生の声で僕はあわてて前を向いた

長崎…結磨か…

その小さな背中を僕は目を細めてみていた

## 第2話 変人からの拒絶（前書き）

正体は変人の結磨様に出会ってしまった龍  
何とか話しかけようと試みます！

## 第2話 変人からの拒絶

あれから三日がたった

あの転入生のことは何度も気にすることがあったが話す機会も何もなかった

ただ…

……………

ただ、ふと顔を見たときに寂しそうな目をしていた気がした  
キザかもしれないけど

今時流行らないかもしれないけど

それが本当の感情なんだ

「はぁ…どうしょ…」

まあどうしようもないんだけど

ただ長崎結磨と話しをするにはどうしたらいいか  
そればかりを考えていた

…あれ？

長崎結磨と…田辺勝麻

「あれ？羽山じゃない？」

「おー…」

長崎に気づいていないふりをして田辺と話し始めた

「お菓子持ってる？」

「あーあいつがもってる」

…え？

田辺の指差すほうには彼女がいた  
話すきっかけになるかも

「サンキュッ！田辺！」

「え？」



そうだ

そうだよ

そうだよなッ！

やっぱりこれは神様がくれたチャンスだよな！

僕は長崎の前に立って深呼吸した

「お菓子ちょうだい！」

思いきり笑った笑顔

思いきり広げた手のひら

「……………」

彼女は笑いながら首を振った

…あっけなく初めての会話は終了した

「…お前何やってるんだよ？」

田辺が僕の首に手をかけた

笑ってない

どっちかというところ怒ってた

「初対面に話しかけちゃってさ」

な…なに？

何で微妙に怒られちゃってんの??

「いこ、長崎」

「…あ」

長崎結磨は僕の前から姿を消した

ただ一つわかったのは

田辺は長崎を守っているということ

僕はなんとなく落ち込んでその日から長崎に話しかけることをやめた

## 第2話 変人からの拒絶（後書き）

よんでくださってありがとうございます  
< 作者より >

次話から結磨様は中学生  
変人ぶりをとくとみなさい！  
< 結磨様より >

### 第3話：変人の日常（前書き）

結磨様に話しかけようと試みた龍

けれど結磨様の幼馴染みにはねかえさえてしまう

結磨様と話すのを諦め、受験勉強に没頭した

…のはいいんだけど！？

### 第3話：変人の日常

あれから僕と長崎はあまり関わらずに中学生になった  
もう僕と長崎の関係は途絶えたはず…だった

はずだったのに…

同じ学校ってなんなんだよ！？

クラスまで一緒だし！

ちなみに田辺も同じ学校：クラスは違うけれど

まあ別に長崎の本性を知らなかった4月はそんなこと「ちよつとしていいこと」くらいにしか捕らえていなかったんだ

10月

「しよ～～～つつちや～～～つつんっ」

ウゲツまた来た！

僕と友達の鈴木翔がお弁当を広げた瞬間、長崎は3秒で飛びついてくる

「お弁当食べよー！あ、沼も一緒だよ」

沼：本名大沼由紀は、長崎と1番仲がいい

まあ少し長崎のテンションについていけないときもあるけど

「なにいつてんの！？鈴木は僕と食べるの」

「お黙り！結磨様に逆らう気！？大体、MEの翔ちゃんなんだからなにしたってMEの勝手だし、ME様が回ってるから地球が回ってるのよ！？少しくらいご褒美があつたっていいじゃない！」

「いつからお前の鈴木になったんだよ…」

「翔ちゃんが生まれる前から！あんたとセットで100円で買ってあげたのよ！」

「…俺、長崎より先に生まれたんですけど…」

こんな会話が日常会話

まったく…長崎は塾のときはすごくおとなしかったのに…

中学に入ってからエロいしナルシーだし…教室で踊るし…

まったく…

「変人のクセに！」

ボカッ！

「はーちゃーん 私様は普通よ？変人じゃないから」

いや、うそ言うなよ…

僕、羽山龍は長崎から「はーちゃん」と呼ばれるようになった

ていうか…女子と一緒に弁当食べよ！（殴られてすねた（笑））

友達いねえのかよー！ー！ー！ー！！

「なんだまた長崎一緒なのー？」

「もう日常だよなー」

僕たちがお弁当を食べ終わる時間帯に、学食組の菅浦恭介と原野学が戻ってくる

同時に大沼は女子の元へ戻る

…長崎はまだ滞在

「セクハラ社長と係長じゃないか、社食はもう食べたのかね？」

「なんじゃそりゃー（笑）」

「俺セクハラ社長ー？」

笑い声が響く中で僕も笑う

正直長崎は面白い！

「でもさあ長崎がきてからこのグループあかるくなったよなー」

「ホントホント！」

…そうだ

僕たちのこのグループは、前まではクラスでも嫌われた男子が集まって、休み時間ひっそりとすごしてた

でもいつからだろう…

長崎が翔を思いきり笑わせた

翔も、学も、恭介も…僕も笑ってた

僕らがどんなに滑ったギャグを連発しても、笑ってくれた

時にはだめだしもしてくれた

…正直、長崎はすごい

そのうち僕らは、いじめられなくなって、昼休みには一番騒ぐグループになっていた

「マジ感謝だつて!」

「やだゝ係長ゝそんなことはありませんよゝ（笑）」  
キンコーン…

「もう授業ジャン」

「そうだねゝシーユゝ マイリトルベイビー」

…どうやったらこんなに変人になれるんだろう

…本日4回目のチャイムがなり終わった

みんな一斉にドアから出て行く

…でも僕たちはその前に

勝負だ!!

「すーーーーーず…」翔ちゃゝゝゝゝゝん 「」

「…なに? 長崎」

「今日何時に帰っちゃう系?」

「もう帰るよ」

「じゃあ一緒に帰ろうゝゝ」

…負けた

いつもチャイムが鳴り終わるとどっちが先に鈴木を誘えるか勝負している

当然勝てるわけないのだけど

「…あんなにやってるの? 20円」

「に…20…?」

長崎は僕を指差した

「そう! あんたのこと! あんたたちを買ったとき翔ちゃんが80円、あんたが20円だったの! あんたも一緒に帰る?」

はあ…まったく

「うん」

こいつは

「えへへっ！うそだよ！3人で仲良くかえろ！」

いいやつだか悪いやつだか

わからない

### 第3話：変人の日常（後書き）

次回、結磨様が泣いちゃうかも！？

泣いてなんかない！はーちゃんのばかあ！

< 結磨様より >



#### 第4話：変人の涙（前書き）

結磨様と同じクラスになった龍は、結磨様の変人ぶりに圧倒されちゃった！

## 第4話：変人の涙

「すーーーーーず」「しょーーーーーうちゃん!」「」

……

「なに?」

「一緒にかえろ」

もうこれが日常になっている

「20円も早く!」

長崎は元はいいやつだって

最近そのことが身にしみるように感じる

…でも

…でも

「20円?」

「あつうん!」

一年半前の田辺からの拒絶、それと…最近聞いた田辺からの話  
それが今一番引かかる

3日前

僕は放課後の補習の教室に向かっていた

「おい、羽山」

不意に僕のことを呼ぶ低い声が聞こえた

「なに?田辺」

田辺は難しそうな顔をしてたっていた  
ゆっくりと一歩ずつ近づいてくる

「結…じゃない長崎と仲よさそうじゃん」

「…まあ、友達だし」

一気に田辺の顔が不機嫌になる

…どうした?

「友達？長崎もそう思ってると思うの？」

…え？

「お前だってどうせ聞いてるだろ、あの噂…」

僕は一年半前、誰かから聞いたあの言葉を思いだす

「アイツ友達？」と誰かが聞くと  
相手が誰でも

「違う」

と長崎は答える  
つまり友達と認めてない

「あの噂は、俺が長崎を守るために流した」  
それだけ言い残して、田辺は去っていった  
…守るため？

「じゃあな」

鈴木は途中の駅で僕たちと別れる  
つまり、途中駅から僕らは2人きりってわけだ  
…いまなら聞けるかもしれない

「ねえ長崎」

「ん？」

長崎はいつもと同じように笑いながらこっちを向く  
「僕たちって友達？」

君の笑顔はいつきに固まった  
「違うよ」

間があいてから長崎は答えた  
すべて失った気がした  
時が止まった気がした  
近いはずなのに遠い

「じゃあなんなの!？」

僕はついむきになる

友達じゃないの？

じゃあどうしてこんなに仲良くしてくれるんだよ!？

「バーチャルフレンド、まあようは偽者の友達だよ」

「鈴木は!？」

「このクラスの人皆そうだよ」

もう何も言葉が出なかった

「…どして？」

「…」

僕はもう張りけそうだった

「今のあるたたちに見せてるあたしはほんとのあたしじゃない」

じゃあ僕達が今まですごしてきた日々は

うそなの？

全部

全部うそなの？

「あたしの笑顔は全部うそなの、あたしの友達は、勝麻ちゃんと初音だけで十分なの…でも、1人には絶対になりたくない!」

……嘘だったんだ

駅のホームでこう話す僕らは完全なる不審者だった

「と…とにかくこっち来て」

「…うん」

僕らは公園へ行った

#### 第4話：変人の涙（後書き）

次回、結磨様の過去が明らかに…  
まだまだ小説は続きます

はーちゃんなんかに弱みは見せない！  
結磨様は強いんだから

## 第5話：変人の過去（前書き）

結磨様の過去がすべてわかってちゃいます！

## 第5話：変人の過去

僕たちは人気のない公園に移動した

それと同時に長崎がきつく僕をにらんできた

「あたしは人を信じない」

「…なんで？」

「あんたみたいなマザコンにはわからない」

うつと僕は後ずさった

何でこいつ僕がマザコンだって知ってるんだよ！

僕は超がつくほどのマザコン

小5までの好きな人はお母さん

外出をするときはお母さんの手をつなぐしお風呂もいまだにお母さんと入ってる

寝るときもお母さんと一緒だし…ってそんなことどうでもいいんだよ！

「マザコンって関係ないじゃん！」

「あたしのお母さんはあたしが小4のときに死んだ」

…え？

あまりに唐突ですぐには全然把握できなかった  
死んでる？

長崎結磨の母親が？

結磨様の母親が？

「今まで友達だと思ってた人からの同情の目、離れる人はすぐに離れていった」

ああ…わかる

いつものようには接せなかったんだ

「態度が変わらなかつたのは初音と翔麻ちゃんだけだった」

…田辺は知ってたんだ

長崎が同情の目で見られていたことに

でもだからってなんであんな噂を流す？

逆に友達が増えたほうが…

「だから友達なんてそんなものなの、そんな思いするくらいなら、あたし、友達なんて要らないよ！」

…だから長崎に友達ができなくなるようなことをわざわざ？

「でも1人にはなりたくないってこと？」

長崎は何も言わずにうなずいた

「寂しいね」

少し笑って「いいの」と答えた長崎は少し悲しそうだった

…でも僕は、そんなこと聞いても今も態度変わってないよね？

それでも僕は友達じゃないの？

「…もう人は信じられないんだから」

絶妙のタイミングで結磨が発言した

…ああ、そうか

でもそんなの…

「でもそんなの…お母さん望んでないよ！」

「いいの、あたしの人生なんだから」

何でだよ

僕は一生長崎の友達にはなれないの？

僕も田辺になりたい

僕も…「初音」になりたい

「じゃあ挑戦してみてもいい？」

「え？」

「僕が君の友達になれるか」

友達になりたい

僕を信用して

君のコト、本当に…

「勝手にして、一生無理だと思うけどね」

無理なんかじゃない

不可能なんかない



今までの笑顔も、  
今までの会話も、  
すべて嘘だったのかもしれない  
それでも  
君がどんな性格だったとしても  
君がどんなに笑わなかったとしても  
大好きなんだよ

## 第5話：変人の過去（後書き）

次からは、龍が結磨様の友達になろうと超頑張ります！  
< 作者より >

結磨様は誰も信じない！  
そう決めたの！  
< 結磨様より >

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5843f/>

---

結磨様の休日

2010年10月20日00時59分発行